

兵庫教育大学言語表現学会

2022 年度研究発表会・第 42 回総会

## プログラム・要旨集

期日：2022 年 12 月 4 日(日)

会場：兵庫教育大学 共通講義棟

兵庫教育大学言語表現学会 2022 年度研究発表会・第 42 回総会

参加費：無料

会 場：兵庫教育大学 共通講義棟

主 催：兵庫教育大学言語表現学会 (<http://gengo-hyogen.org/wp/>)

後 援：兵庫教育大学

○受付(10:00～) 共通講義棟 1 階ロビー

○研究発表(午前の部 10:30～12:15、午後の部 12:55～14:05) [1 件につき、研究発表 25 分、質疑応答 10 分]

第 1 会場 共通講義棟 106 教室

1	11:05-11:40	岩田あゆ実	ジェンダーから見た高校国語科研究—「役割語」に焦点を当てた授業に関する一考察—
2	11:40-12:15	稲垣導彦	英文法学習に寄与する国語科文法指導の在り方に関する調査研究
休憩 12:15-12:55			
3	12:55-13:30	増永雄一郎	動画テキストを学習材とした言語活動の可能性—英国映画研究所が示す動画の指導法を援用して—
4	13:30-14:05	石津恒哉	動画を用いた「書くこと」の指導—読書感想文指導を題材として—

第 2 会場 共通講義棟 104 教室

1	11:05-11:40	小畑匡輝	高等学校古典における古典常識と文学史の指導に関する実践研究
2	11:40-12:15	西村信作	「問い」の質的向上に着目した読みの学習指導に関する研究—「解釈」の深まりを目指して—
休憩 12:15-12:55			
3	12:55-13:30	七ツ谷祐太	「読みの視点」を明確にして読むことで「読みの深まり」と「認識の深化」を連関して生起させる文学の授業——『ごんぎつね』を例に——
4	13:30-14:05	板東俊明	文学教材の主題の類似性に着目した比べ読み学習における読みの推進—『大造じいさんとガン (椋鳩十)』と『クマと少年 (あべ弘士)』の比べ読み学習—

第 3 会場 共通講義棟 108 教室

1	10:30-11:05	山本品	ビデオを用いたリフレクションによる英語の授業改善
2	11:05-11:40	瀬島沙紀	高等学校における映画を使った授業実践
3	11:40-12:15	中谷昌彦	中学校における生徒の特性を考慮した語彙学習方略の指導
休憩 12:15-12:55			
4	12:55-13:30	芦谷陽輝	中学校英語科におけるフォニックス授業の導入と実践
5	13:30-14:05	宮田倫	定時制高等学校におけるシンセティック・フォニックスを用いた英語の授業：生徒の英単語の読みに対する自信の変容

○休憩＋研究交流(14:05～14:35)

○総 会(14:35～15:05) 共通講義棟 106 教室 (第 1 会場)

○特別講演(15:15～16:45) 共通講義棟 106 教室 (第 1 会場)

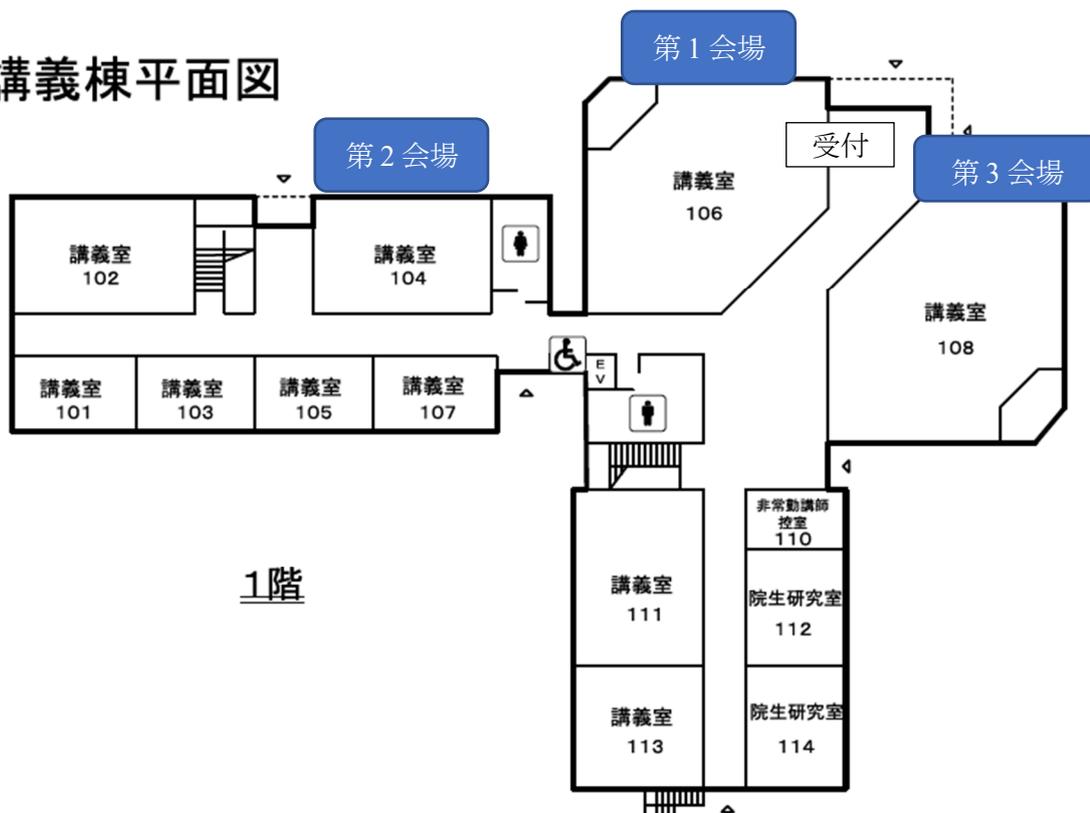
演題：これからの英語教育のために過去から学び現状を問う

講師：江利川 春雄 (和歌山大学名誉教授)

○閉会行事 (16:45～16:55) 共通講義棟 106 教室 (第 1 会場)

※発表者の方で当日発表資料がある場合は、指定されたアップロード先に電子ファイルをアップロードの上、紙媒体 10部を各自でご用意ください。

## 共通講義棟平面図



## ○研究発表

### 第1会場 106 教室(国語教育・国文学)

ジェンダーから見た高校国語科研究—「役割語」に焦点を当てた授業に関する一考察—

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 岩田あゆ実(いわたあゆみ)

本研究は、「役割語」の使用が学習者のジェンダー・バイアスにどのように関わっているのかを明らかにすることを目的としている。

発表者の研究で、高校国語教科書は一定のジェンダー・バイアスが見られた。教材の取り上げ方を考えていくうえで、「役割語」を使った授業を開発することが必要である。「役割語」は、ヴァーチャル日本語ともよばれる言葉遣いである。生徒自身の言葉遣いを見直すとともに、「ステレオタイプ」を内省的に考えさせることができるのではないかと考えられた。

そこで、「役割語」を使って生徒自身の周りの言説について気づかせ、内省的思考を促進させることを目的に授業を行ない、生徒が普段の言葉遣いについてどのように考えていたのかを見た。その結果、全てのクラスで「役割語」と「ステレオタイプ」の記述が5割以上見られた。普段の言葉遣いについて言及し、知らない間に周りの言説から影響を受けていたことに気づいた感想も見られた。今後は教科書の教材で、「役割語」にどのように注目すべきか、検討を行っていく必要がある。

## 英文法学習に寄与する国語科文法指導の在り方に関する調査研究

兵庫教育大学大学院言語系（国語） 稲垣導彦（いながきみちひこ）

本発表の目的は、教科横断的な学習という観点から英文法に寄与する国文法の在り方を検討し、既存の枠組みの中で、文法概念に関する具体的な指導法を提出することにある。近年では、小学校への英語科の導入や教科横断的な学習の推進といった動きを受けて、メタ言語能力涵養の必要性が認識されるようになり、国語科はその基幹教科と目されている。

これを踏まえ、本発表では、中学校の国文法と英文法で用いられる文法用語の異同について分析し、齟齬に対しては解消する一案を、符合に対しては教科横断的に生徒の理解を深める指導案を提示することを試みる。具体的には、英語科と国語科双方の検定教科書における文法用語の実態を概観した上で、特に品詞の分類方法や定義を示すことで、その類似性と差異性を明らかにする。今後の見通しとしては、品詞の定義、文構造や文型を理論言語学並びに言語習得の視座から洗い直すことによって、文法指導の新たな可能性を探る。

## 動画テキストを学習材とした言語活動の可能性

—英国映画研究所が示す動画の指導法を援用して—

兵庫教育大学大学院言語系（国語） 増永雄一郎（ますながゆういちろう）

学校での学びを学校内だけで終わらせず、日常生活へとつなげるために、授業者は学習者の身近な言語生活およびすぐれた言語文化に学習材を求め、多様な学習材を教室に持ち込む必要がある。実際に、学習者が使用している小学校国語科教科書には、新聞やポスター、パンフレット、利用案内、マンガなど多様なモードで構成されたメディアが学習材として配置されている。しかし、今を生きる学習者が日常的に楽しんでいる動画は学習材として取りあげられていない。そこで、動画を技術的に理解することにプライオリティを置く英国映画研究所が示す動画指導法を援用して、動画テキストを学習材とした言語活動の構想および実践を行った。その結果、従来の国語科学習と重なる思考活動や動画テキスト特有の学びが生まれた。発表当日は、学習者の発話や記述を取りあげながら、動画テキストを学習材とした言語活動の実際を述べる。

## 動画を用いた「書くこと」の指導—読書感想文指導を題材として—

兵庫教育大学大学院言語系（国語） 石津恒哉（いしづこうや）

本発表の目的は、主として書くことに課題がある生徒に対しての読書感想文執筆支援の方法を提案することである。その際「動画の活用」と「読書感想文の型の提示」を柱とする。

書くことに課題のある生徒は、読むことにも課題を持っていることが多い。その場合短編小説等で書き方指導を試みたとしても、そもそも物語内容を理解できないことが多く感想も持ちにくい。そこで、具体的なイメージを持ちやすい動画を活用する。動画の活用によって学習者は即座に内容を理解するとともに感想を持ち、書くことの指導を受ける段階に立つことができる。また、動画の活用は意欲喚起にもつながるため、作文に対して前向きになれない学習者へのアプローチにもなる。

その上で読書感想文の型を示すことで、学習指導要領や先行研究で示されている「多様な意見を想定しながら自らの考えを形成すること」や、「根拠を明確にした文章の書き方」を習得させることが期待できる。

以上の内容について実践を通して検討したことを報告する。

## 高等学校古典における古典常識と文学史の指導に関する実践研究

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 小畑匡輝(こばたまさき)

本発表の目的は、高等学校での古典の指導において、古典文化の理解を促す指導方法を探ることにある。高等学校における古典作品の指導については、従来から受験のための品詞分解や現代語訳が重視されている状況があり、そこから生まれる生徒の古典嫌いや苦手意識が問題視されて来た。これを克服するための指導方法が求められている。

本発表では、認知科学の知見を応用しつつ、これまで周辺的情報として扱われてきた古典常識や文学史に関わる学習内容を先行オーガナイザーとして学習者に包括的かつ体感的に理解できる形で提供する指導プランを提示する。議論の手順としては、第一節で、理論的前提として本発表が用いる専門的概念を概観し、第二節と第三節で、それぞれ具体的に古典常識と文学史の学習に応用したものを提示する。第四節で、実際に実習校において実践した授業の記録と効果を振り返り、今回の取り組みが生徒の古典文化に対する知的好奇心の喚起に繋がる可能性を探りたい。

### 「問い」の質的向上に着目した読みの学習指導に関する研究—「解釈」の深まりを目指して—

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 西村信作(にしむらしんさく)

本研究は、学習者の「問い」を基に読み進めることで、文学作品を読み深める学習指導について考察するものである。文学作品を読む過程においては、空所や否定箇所(矛盾)に働きかけることは、「問い」の喚起やその追究に繋がり、結果として「問い」の質的向上(「解釈」の深まり)を促すと考え、学習活動を検討した。

指導過程においては、学習者が喚起した「問い」を共有し、関連づけられるテキストの範囲に応じて学習過程に位置づけていく。逐次、喚起した「問い」を更新し、学習活動に反映させることで、学習者が段階的に「問い」の質を向上させていくことを目指した。その分析結果について報告する。

### 「読みの視点」を明確にして読むことで「読みの深まり」と「認識の深化」を連関して生起させる文学の授業——『ごんぎつね』を例に——

兵庫教育大学大学院言語系(国語) セツ谷祐太(ななつだにゆうた)

文学を読むことの学習では、長く「読みの深まり」と「認識の深化」が目指されてきた。そこで、本研究では、「読みの視点」を明確にして読むことで、「読みの深まり」と「認識の深化拡充」が連関して生起させることができるという仮定のもと実践を行った。実践においては、学習者が、テキストの機能である「否定可能箇所」への反応を契機に、「読みの視点」を顕在化し、その視点で読むことで、一貫性のある作品を創出(「読みの深まり」)することができると考えた。また、「否定可能箇所」に反応することは、「読みの深まり」と「認識の深化拡充」を連関して生起することを可能にするともされている。本発表では、「読みの視点」を明確にして読むことが、一貫性のある物語を創出すること、さらに、「認識の深化拡充」を連関して生起させることに有効であったかを考察し、その成果と課題について明らかにする。

## 文学教材の主題の類似性に着目した比べ読み学習における読みの推進—『大造じいさんとガン（椋鳩十）』と『クマと少年（あべ弘士）』の比べ読み学習—

兵庫教育大学大学院言語系（国語）板東俊明（ばんどうとしあき）

文学教材における比べ読み学習では、話の展開を意識して読んだり、類似点や相違点に気付いたりすることで、作品の理解を深めることに有効であることは先行研究により明らかにされている。しかし、比べ読み学習をすることで学習者が学んだことを生かして自らが選択した物語を読み進めるかどうかについての授業実践や研究は十分ではない。

そこで、本研究では小学5年生を対象とした主題の類似性に着目した比べ読み学習をすることで、学習者が自ら文学教材を選択した読みができるかを検討した。二作品とも動物と人間との関係性について考えることができる教材である。二つの教材を比べることで、結末場面における登場人物の関連人物に対する行動の相違点から、主題に迫っていく実践を行った。学習者が選択した物語と比べ読み学習で学んだ物語とのつながりや授業後のアンケート結果を分析することで、主題の類似性における比べ読み学習が物語を選択することに効果があるのかを検証した。

### 第3会場 108教室(英語教育)

## ビデオを用いたリフレクションによる英語の授業改善

兵庫教育大学大学院言語系（英語）山本晶（やまもとあき）

本研究では、教師がビデオを用いたリフレクションを通して授業改善を行う過程を、発表者自身の授業実践を対象に分析する。具体的には、発表者の担当した授業を撮影し、そのビデオを授業分析ソフト Video Enhanced Observation(VEO)にアップロードした。そして、指導教員、発表者で共有し、リフレクションを行った。また、メンターからは、授業後に口頭でコメントをいただいた。授業で課題になったのは、(1) ティームティーチングにおける連携、(2) 活動前の生徒への指示、(3) 生徒の主体的な読みの指導の3点であり、これらの改善が目指された。VEOに残されたタグ、コメント、自身の実習記録などの分析から、十分な課題解決に至っていない点もあるものの、課題を意識しながら授業を行い、振り返ることで、授業に対する発表者自身の理解が深まり、改善への一歩を踏み出せていることが明らかになった。

## 高等学校における映画を使った授業実践

兵庫教育大学大学院言語系（英語）瀬島沙紀（せじまさき）

本研究の目的は、学校現場におけるリスニング力向上のための映画の活用方法とその効果を明らかにすることである。大学入試共通テストでは、従来に比べ、リスニングの配点が高くなり、高校生にとってより一層リスニング力の必要性が高まりつつあるといえる。多岐に分けられるリスニング力の中でも特に、音声変化認識力が日本人学習者にとって大きな課題の一つであると考えたからである。映画のセリフでは、教科書などに付属しているCD音声と異なり、映画のセリフでは、数多くの音声変化が登場するので、音声変化を学ぶ教材として最適であると考えた。本研究に関わる授業実践は、兵庫県内の公立高等学校の2年生の選択科目の英語の授業で実施した。当該授業を履修している15名に対し、6週間、計10回にわたり洋画を用いた授業を行い、音声変化の変化、リスニングに対する自己評価・自信の変化を、質問紙調査と、各授業の振り返りデータを元に検証した。

## 中学校における生徒の特性を考慮した語彙学習方略の指導

兵庫教育大学大学院言語系（英語）中谷昌彦（なかにまさひこ）

中学校では英語の語彙学習の大部分を生徒の家庭学習に頼っている場合が少なくない。デジタル教材やタブレット端末の普及によって、ビッグデータを用いた個別最適化学習が実用化され始めてはいるが、それは画一的な学習方略であることが多く、生徒の特性に合わせた学習方略とは言い難い。そこで、学習方略を明示的に示した語彙学習指導を行うことで、生徒の特性によってどのような語彙学習を好みやすい傾向にあるのかを検証した。

3年生の生徒に対して、阿久津(2014)を参考に、MI理論に基づいた生徒の特性の把握と、ペア学習や語彙のイメージ化など、各特性に対応した語彙指導方略の指導を行った。語彙の定着度を測るテストと、語彙学習に対する自己評価を尋ねるアンケートを実施した。

分析の結果、対人の特性が高い生徒が多く、ペア学習を通して学習した単語の定着度が高かった。一方で語彙のイメージ化は特性に関わらず学習効果があることが明らかになった。また、ペア学習、語彙のイメージ化の学習方略に対して好意的な意見が多く見られた。

## 中学校英語科におけるフォニックス授業の導入と実践

兵庫教育大学大学院言語系（英語）芦谷陽輝（あしたにはるき）

2020年度から小学校で英語が教科化され、小学校高学年から英語の読み、書き指導が行われることとなった。そこで小学校では、英語の音と綴りの関係を教えるフォニックス指導を行う事例が増えてきている。しかし、未だフォニックス指導を行なっている小学校は多くなく、中学校に進学した際に英語の音韻認識能力が未熟で、英単語の読みに困難を抱えている生徒がいる。本研究では、中学校の英語科において、フォニックス指導を帯活動の一環として6週間継続的に行うことで、生徒の音韻認識能力へ与える影響、効果を検証することを目的としている。フォニックス指導の前後で生徒が未知語を正しく読めるかの読みのテストをし、検証をする。また、アンケート調査を実施して、フォニックス指導が生徒の英語学習にどのような影響を与えるのか統計を取る。その結果を元に、中学校でフォニックス指導をどのようにして取り入れるのか、また、6週間では実施できなかった指導を含め、中学校で必要な指導について考察する。

## 定時制高等学校におけるシンセティック・フォニックスを用いた英語の授業：生徒の英単語の読みに対する自信の変容

兵庫教育大学大学院言語系（英語）宮田倫（みやたさとし）

定時制高等学校には英語学習に問題を抱えている生徒が少なくない。それは生徒の発達特性や、英語の文字と音の関係の複雑さなどにも起因することが考えられる。そこで、文字と音の関係を明示的に示し、複数の感覚を通して指導を行うシンセティック・フォニックスを用いた授業を行い、生徒の英単語の読みに対する自信を高められるかを検証した。授業は Kelly and Phillips (2022)を参考に、音の分類や授業手法の検討を行い、洋楽、ホワイトボードや文字マグネットを活用して、実習期間の授業をデザインした。2年生の生徒に対して、前述のボードを用いて手の感覚を使いながら英単語の読みの授業を行い、英語学習に関するアンケートと、英単語の読みの自己評価を実施した。分析の結果、生徒の英単語を読むことに対する自信が向上し、アンケートにおいても事前・事後での変化があった。特に、英語を聞くことが好きという質問で向上が見られた。また、生徒は実施した授業を肯定的に捉えていたことも明らかになった。

## ○特別講演

これからの英語教育のために過去から学び現状を問う

江利川 春雄（和歌山大学名誉教授）

すべての子どもたちに言葉を学ぶ面白さと楽しさを体験させ、平和で民主的な協同社会を担う主体に成長させたい。言葉の教育を、技能・道具主義に矮小化することなく、思考と感性を育て、人間の全面的な発達に寄与するものになりたい。そのために留意すべきことを、主に英語教育の視点から提案します。

まず必要なのは、歴史から学ぶこと。たとえば小学校英語教育は明治期から実践され、賛否両論を巻き起こしながら、明治末期には英語科が廃止されました。文法訳読よりも会話中心のコミュニケーション重視を主張する意見も明治期からありましたが、成功しませんでした。何が問題だったのでしょうか。

また、英語教育と国語など他教科との連携や、学習者の主体性を重視する指導法も明治期から主張されており、今日に貴重な示唆を与えてくれます。

次に、教育政策の現状を問うこと。2021年度から実施された中学校の学習指導要領では、生徒が接する英語の語彙が倍増し、内容が一挙に難化しました。上位層に偏った「グローバル人材」育成策が、かえって英語嫌いを増やしていないでしょうか。生徒や教員へのアンケートも踏まえ、現状の問題点を探ります。

他方で、児童・生徒の主体性を重視し、協同的な学びを取り入れた授業改革がめざましい成果を上げています。実際の授業風景を交えながら現状を紹介します。

これからの教育にはデジタルやAI（人工知能）の活用は不可避でしょう。しかし、そこには落とし穴もあります。それを踏まえ、AIにはできない異文化理解や協同学習を取り入れた言葉の教育を提案します。

江利川 春雄（えりかわ・はるお）

1956年埼玉県生まれ。神戸大学大学院教育学研究科修士課程修了。広島大学で博士（教育学）取得。専攻は英語教育学、英語教育史。現在、和歌山大学名誉教授。日本英語教育史学会名誉会長。学びの共同体研究会スーパーバイザー。

著書に『英語教育論争史』（講談社、2022）、『日本の外国語教育政策史』（ひつじ書房、2018 \*日本英語教育史学会著作賞受賞）、『英語と日本軍』（NHK出版、2016）、『英語教科書は<戦争>をどう教えてきたか』（研究社、2015）、『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』（大修館書店、2012 編著）、『受験英語と日本人』（研究社、2011）、『英語教育のポリテイクス』（三友社出版、2009）、『日本人は英語をどう学んできたか』（研究社、2008）、『近代日本の英語科教育史』（東信堂、2006 \*日本英学史学会豊田賞受賞）、監修・解題『英語教育史重要文献集成 全15巻』（ゆまに書房、2017～19）など。